エリア限定
姫路菓子博で実証実験
ワンセグ放送

限定エリア内で信頼される情報提供と地域SNSとの連携でこれまでにない参加型メディアを確信

「会場内は連日、大変混雑しています」とホームページで連日案内されたほど、全国からの来場者でごった返した「姫路菓子博2008」（第25回全国菓子大博覧会・兵庫）。スイーツブームを受けて、4月18日から5月11日までの会期24日間に約92万人以上の大入りとなった。天下の白鷺城（姫路城）を背景に、全国名産の菓子や変わりスイーツに老若男女の顔がほころんだ。和やかな菓子博会場をフィールドに、エリア限定ワンセグ放送（愛称:「姫路スイーツワン」）の実用化に向けた実証実験が行われた（実施主体:兵庫エリア限定ワンセグ放送実験協議会※）。この実証実験からエリア限定ワンセグ放送の可能性について関係者に聞いた。

※兵庫エリア限定ワンセグ放送実験協議会…（株）NTTドコモ関西、（株）サンテレビジョン、ソフトバンクモバイル（株）、第25回全国菓子大博覧会・兵庫 兵庫県実行委員会事務局、DXアンテナ（株）、日本放送協会神戸放送局、（株）日立製作所・（株）日立システムアンドサービス、姫路ケーブルテレビ（株）、姫路市、兵庫県、（株）メディアキャスト

「ワンセグケータイ」を使った エリア限定の放送・通信融合サービスと コンテンツの地産地消を 来場者が実体験

映像情報とデータ放送を サービス

「エリア限定ワンセグを楽しんでいただいているのは、20代から40代の方が中心です。年配の方もワンセグに興味をお持ちだと受信されています」

菓子博の会場にある「姫路スイーツワン」プロジェクトの体験コーナーで、担当者は説明してくれた。こんなエピソードも聞かせてくれた。「このワンセグを体験するために、宮城県からわざわざ来たという方がいました。メディア関係者ではなく、一般企業に勤めている方で、ワンセグに関心があり、ネット検索で知り、駆け付けて来てくれたそうです」。

体験コーナーでは、エリア限定ワンセグを受信するために設定方法を案内し、併せて視聴体験アンケートも行っている。アンケートには約4,600人が回答を寄せてくれたという。今後の利用方法では、観光情報や災害時に役立つという意見が多く、道路や鉄道の交通情報にも期待があった。映像番組の3分間の長さは、ちょうど良いという意見が多く、音声については屋外で見ているので周囲の音がうるさく、できれば字幕表示がほしいという意見もあった。

では、姫路スイーツワンはどんなサ

インタビュー　プロジェクトを推進した兵庫県

牧 慎太郎
兵庫県
企画県民部長

地域SNSとの連携で “顔が見える”メディアとなり、情報の信頼性も高まる

兵庫県は、ICTの成果を実感できる社会の実現を目指す「ひょうご情報交流戦略」に、平成19（2007）年からの3年間で取り組んでいます。ここでは、一人ひとりの個性が織りなす地域力の実現で、ハード指向から脱して、より多くの地域住民の参加のあり方を模索しています。

それを実証する取り組みの一つが、姫路菓子博のエリア限定ワンセグ放送「姫路スイーツワン」です。誰でも持っているケータイで、どういったコミュニケーションを広げることができるか。通信としてのケータイを考えると、輻輳問題があります。そこでワンセグという放送の持つ強みを生かしながら、通信を融合させた新しいサービスに取り組んだものです。

姫路菓子博内のエリアに限定したワンセグ放送で、会場ガイドやその日に取材した来場者の様子などを提供するとともに、来場者がケータイのカメラやビデオで撮影した「おいしい笑顔」のシーンを投稿してもらい、地域SNS（ひょこむ）の協力で公開しました。エリア内で“撮れ”たての情報を来場者が共有するという、まさに「コンテンツの地産地消」をねらったものです。

普段使っているケータイで、自分の身近な情報を口コミ的に地域で広く共有していくことの意義は大きいと思います。地域SNSですから、メンバー同士なら友人関係やブログの書き込みなどを見れば、情報発信者がどんな人かわかります。そういう意味で顔が見えるメディアとして、普段から信頼性が培われていることが重要だと考えています。

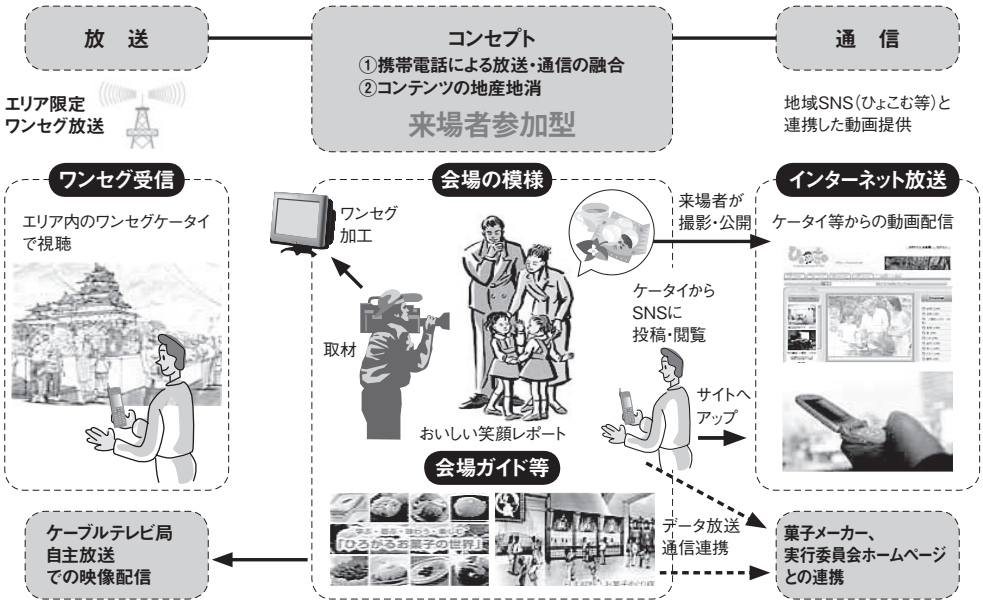
災害や犯罪が発生したときにも、地域住民が顔の見えるメディアを活用して機動的に情報共有を図ることができれば、それが大きな地域の力となるでしょう。

エリア限定で、しかもケータイで見ることができるワンセグ放送は、行政としてもさまざまな活用が想定されます。例えば、現場で取材・編集・印刷して号外を発行できる車載型の新聞製作装置のように、エリア限定ワンセグ放送も、災害時に避難所などで必要な情報の現場発信ができるような施策も考えていく必要もあるのではないでしょうか。

ービスを提供したのか〔図1〕。

映像情報として、博覧会の会場ガイドや姫路城周辺の観光案内、会場の模様などを、姫路ケーブルテレビが取材して放送。来場者参加型番組では、「菓子博のクイズ」や「おいしい顔レポート」、「お菓子試食レポート」などの来場者からのメッセージも提供。

データ放送では、会場案内やナビ情報などを案内した。各展示館の待ち時間がケータイサイトとリンクして案内され、スポンサー情報も提供された。また、ワンセグのブックマーク機能を生かした「家へ帰って楽しむ」という試みも行っている。



【図1】エリア限定ワンセグ放送実証実験

注目したいことは、地域SNS「ひょこむ」と連携し、会場からの情報投稿と結び付け、番組参加を展開し、SNSサイトでも公開したことだ。より地域メディアとして、厚みを増した。

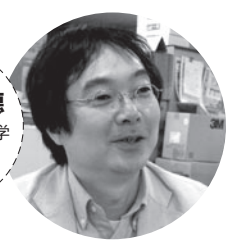
1台のPCで編集から送出まで

菓子博会場に限定したワンセグ放送ではあるが、その内容は映像番組とデータ放送が提供され、ケータイサイトのリンクもあり、地上テレビ放送局が現在実施しているワンセグサービスと何ら遜色ない。それが会場内の小さなスペースに設置された1台のPCセットで、番組の編集（ノンリニア編集）からデータ放送コンテンツづくり、放送のための多重化までのプロセスを行う実にシンプルな構成となっている。

インタビュー　地域とメディアの研究者

マスメディアが伝えきれない地域の細かな情報を伝え、信頼できるメディアとして期待したい

芝　勝徳
神戸市外国語大学
教授



メディアを考えるとき、情報の「粒度」を考える必要があります。「粒度」というのは、情報を伝達する範囲と、情報そのものが持つ有効性の範囲を考えることです。テレビやラジオは県域や広域といった大きなエリアを対象にしていますが、ケーブルテレビやコミュニティFMは、より小さなエリアに伝えることができます。

一方、インターネットのように誰でも情報を発信し、誰でも自由に受信できるメディアが普及しています。ケータイでも世界と情報のやり取りができる時代です。メディアのプロではない誰もが、ケータイという身近なデバイスを使って、世界中に伝えることができるのです。粒度でいえば、マスメディアもより細かな対応に取り組んできています。その一つがデータ放送サービスでしょう。

個人から発信できるインターネットですが、秩序の乱雑さが増してきています。マスメディアは、取材という情報の集計や整理、編集というフィルタリングを経て、信頼される情報を提供してきましたが、時間がかかるという問題があります。

そういう意味で、インターネットのような参加型であり、粒度が細かく、しかも信頼できるメディアが必要になってきているのです。そうした点で、エリアを限定したワンセグ放送は、ラジオのコミュニティFMと同じような働きが期待できます。地元密着や多言語サービスなど、エリア独自の情報を必要とする人に伝えることができるわけです。

また、災害時に避難情報を住民に伝えるとき、エリアを限定できるわけですから、非常に期待できるのではないでしょうか。

エリア限定のワンセグ放送とデータ放送を連携させていくと、細かい粒度でありながら、時間を超えた情報伝達が可能になると期待しています。

こうした設備面まで考えると、エリア限定ワンセグ放送は簡単に、その場所から放送することができるメディア特性がある。どんな場所からでも、放送電波を使って、ワンセグケータイ端末へ放送できるわけで、ユビキタス時代に相応しいメディアだと言える。

今後の利用課題として、エリア限定ワンセグ放送用の周波数が割り当てられていないことがある。姫路スイーツワンでは実験を目的として申請し、手続きを経て期間限定の実験免許を取得して取り組んだ。まさに、電波免許が必要なのである。

例えば、エリア限定ワンセグ放送用の電波周波数が用意され、行政も参加する主体が届け出るだけで利用できるという制度整備があったらどうだろうか。まず、災害地で活躍することが考えられる。実現すれば、被災地で活躍するコミュニティ FMのように、被災者に必要な情報をきめ細かく提供することができる。

電波行政も含めた制度面の整備について、総務省に検討願いたい。

システム関係者は、簡単な操作性と堅牢なシステム設備の安価な提供に取り組んでもらいたい。

少なくともこの2つの課題を解決できたならば、エリア限定ワンセグ放送は地域限定メディアとして発展するのではないか。

(文:吉井 勇・NEW MEDIA編集長)

インタビュー　エリア限定ワンセグ放送のシステムに関して

安価な制作・送出システムの実現がエリア限定ワンセグ放送には不可欠

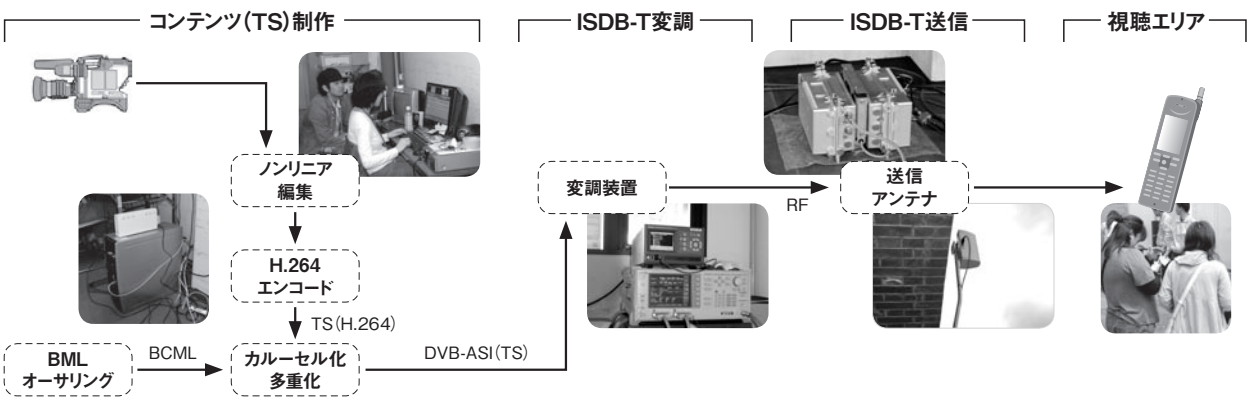
杉本孝浩
(株)メディアキャスト
代表取締役

今までメディアキャストは、技術的知識を必要としない低価格なデータ放送システムを開発し、地デジ局やケーブルテレビ向けに提供してきました。エリア限定ワンセグ放送に対しては、さらに「簡単に持ち運びできる」装置づくりを目指し、今回の実証実験に参加しました。

今回はデータ放送コンテンツ制作とともに、本線映像コンテンツのH.264エンコード、データ放送コンテンツの多重化、TS信号発生までのシステム構築を担当しました。これら一連のプロセスをソフトウェアベースで処理することにより1台のPC上で実現し、地デジ放送の送信装置とともに、コンパクトな実験局システムを構築しました。

エリア限定ワンセグ放送といえども、放送規格(ARIB規格)に準拠したコンテンツ制作と、システム構築が必要で、兵庫エリア限定ワンセグ放送実験協議会で定めた運用規程に沿って必要な部分は新規開発し、会期中の通常運用では専門知識を持たない現場スタッフでも簡単に運用が可能なシステムを実現しています。

エリア限定ワンセグ放送は、同報性と速報性に優れた放送サービスを地域限定で配信し、そしてデータ放送を活用することで通信サービスと連携することができます。ただ、そのサービスの実現には制度面の課題とともに、安価で操作性の良いシステムの提供が不可欠です。メディアキャストは、今後もエリア限定ワンセグ放送に関するさまざまな実証実験に積極的に参画し、さらなる技術開発を進めていきます。



【図2】エリア限定ワンセグ基本システム構成

問い合わせ先　株式会社メディアキャスト
TEL 03-5728-4663　〒150-0044 東京都渋谷区円山町5-3 玉川屋ビル5F　http://www.mcast.co.jp/

(株)メディアキャスト:BML技術を始め、コンテンツ制作技術、放送運用支援など、デジタルデータ放送における多くの経験と実績は高い評価を得る。データ放送製品群として、番組企画支援ツール「MagicDraw」から、BMLオーサリングツール(固定受信用、ワンセグ用)「Foliage」、画面編集ツール「SceneCretor DD」、受信機検証ツール「ShotMUX」、テンプレート型番組更新ツール「DDC-Cue」などがあり、NHK、民放各局、ケーブルテレビ局、コンテンツ制作会社に多数採用され、デジタルデータ放送業界のスタンダード製品として位置づけられている。